

小原國芳からペスタロッチへ

——為すことによって学ぶ—— その3

“FROM KUNIYOSHI OBARA TO JOHANN HEINRICH PESTALOZZI”

——LEARNING BY DOING—— No.3

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

目次

はじめに

I. 小原國芳の場合

1. その人となり
2. 小原の夢 (vision)

3. 人の教育 以上紀要20号

II. ペスタロッチの場合

1. その人となり
2. ペスタロッチの夢
3. 人間性の教育

III. ペスタロッチと小原の類似点

1. 妻たち (ペスタロッチの妻アンナと
小原の妻信)
2. 愛の教育 (全人教育) 以上紀要21号

IV. ペスタロッチの教育 以下本号

1. 母の教育 (幼児教育)
2. 宗教教育 ①ペスタロッチの信仰
②宗教教育

おわりに

小原は前述の『ペスタロッチを慕いて』において、「先生が全生涯を通じて、苦しめたのは誰の為であったでしょう？而も、全身全心の全力を傾注されてのあの血まみれの愛、戦い、祈りは一体、誰の為であったでしょう！いうまでもなく、それは実に人の知れる如く、哀れなる孤児たちの為であった⁽¹⁾。」と書いている。今日の教師の中でこれほどまでに自分を子どもたちのために献げて教育に使命を感じている人はどれだけいるだろうか？ペスタロッチが、小原が、何もかもを献げて教育に打ち込んだその基盤は何だったのだろうか？

小原は同書の中で、「教育の根本義を教えることではなくて、愛することとされた。これは実に、教育の原動力である。燃えたる教育精神、愛さではすまぬ親心！伝道精神、そこにのみ、ホントの方法に生命がわく⁽²⁾。」と

ペスタロッチの教育の根本・基盤は愛することであると
いっている。

今回、私は前号に引き続き、愛の教育を追究し、さらにその源となるものは何かを探って行きたいと思う。
愛、母の愛であり、親心としての神の愛である。

IV. ペスタロッチの教育

1. 母の教育 (幼児教育)

愛の教育を考える時、母の教育が中心となるのではないだろうか。そこで、私はペスタロッチから多くの影響を受けたフリーベル (Friedrich Fröbel 1782—1852) を想う。

ペスタロッチが『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』や『リーンハルトとゲルトルート』など多くの母に関する書物を書いているように、フリーベルも母のための本を書いている。『母の歌と愛撫の歌⁽³⁾』それは美しい母としての感謝の詩で始まる。

「初めての子を見つめる母の感情

神さま あなたは妻である私をとて

幸福にしてください

天上の喜びで

この世の生を飾ってくださいました

あなたは今私を人間の最高の位に

お選びくださり

あなたのおかげで私は天使を産みました

父となられた夫よ いとも清らかな愛の

いとも美しい和合のしるしとして

あなたにこの子を渡します

どうぞ祝福してください

この子には 夫婦の心と心を永遠に結ぶ

何もかもがそろって見つけれられますもの

わが子よ

生まれる時は苦しかったでしょうが、
さあ、おやすみ
あなたの両親の胸もとで愛に見まもられて
きつと いつもやさしい心づかいで
私たちみんなの命として

たいせつにたいせつに
育ててあげましょう

父なる神さま 生命の永遠の泉よ
その泉を この子のためにもその流れを
勢いよく清く
すぎとおるようにお放ちください
私たちはあなたの子どもです——
あなたの家族です
それゆえ 私たちがいつもひとつの愛で
あなたに結ばれていますように⁽⁴⁾

ペスタロッチが学校は温かで自由な一大家庭であることが望ましいといっており、彼ほど家庭を教育の根本として重く見た人はいないようである。家庭（居間）こそはペスタロッチにとって魂の故郷であり、宗教性の源であり、さらにその本質は愛であると理解していた。その愛がやがて創造者の精神にまで高められると信じたのは、その体験を通して得た真理である。

フレーベルの著書『母の歌と愛撫の歌』の編者であるヨハネス・ブリュッファースはフレーベルの教育観を次のように「あとがき」で述べている。「真の人間教育が可能な場所は学校ではなく家庭のみであることを明らかに認めるようになった。家庭にこの困難な問題を解決する能力をあたえること、これが、いまや彼の努力の中心となってきた。彼はそのために書物を書くことはせず、それによって、各個人が自発的にあらゆる魂の力を訓練し、純粋なものとし、人間を高く向上させるような系統だててつくられた教材を生み出そうとした⁽⁵⁾。」学校教育以前の教育の必要性を説いたものである。

前にも述べたように、今、ペスタロッチ？ フレーベル？ そして小原でさえも古い古いと人はいうが、時代が異なり、社会情勢も変り、科学が進歩し、この夏の科学万博では、あらゆる科学技術の可能性が発揮され展示された。例えばロボットがオルガンを弾で、絵を描き、世界中が一つのテレビから一つとなって私たちの前に現われる時代になった。しかし、私たち人間は特に子どもを持つ母親の気持はいつの時代でも変わらないと思う。なかには自分の子どもをコインロッカーや病院の前に置

き去りにする母親が後をたたないが。

子どもを育てるのは母親の責任であり、又父親の責任でもあるが、女の子であれ、男の子であれ、この世の中で一番身近かなのは母親である。母、一女性としては弱い者であったとしても、母になると同時に強さが与えられる。わが子を守ろうとするその気持はあらゆる外敵に向って防御を固めるのである。と同時に豊かな暖かな気持が備わるのである。それはどんな女性であっても（貧しさで生活が苦しい人でも、体が不自由な人でも）備えられるのである。

フレーベルがいつている、「真の人間教育の出発点、人間教育の最も純粋な根源であり、最も確実な基礎といえるものは母であり、母の愛であり、母の存在や母としての本質であり、母と子の内的一致であるといえます。人間の両性についてはやくから理解し、抱きかかえることのできる、いわば神と一致した敬虔な心と情操をもった母親だけが、その資格をもっているのだといえます⁽⁶⁾」

ペスタロッチは『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』の他にも『母の書』として『母親たちのための書』を1803年に書いたのであるが、彼の予期に反して、効果が得られず、当時の母親たちからも無視されてしまった。それはペスタロッチの指導の下にクルーザーが書いたのであるが、途中で続かなくなり、さらにその原稿は紛失してしまったのである。このことについてド・ガン⁽⁷⁾は次のように評している。「母親らが、母親としての本能の第一の靈感によって芽出した自然的な教育法を続けて行ってその子等を教え、以て教育の改革を初めるということは誠に美しい、貴い思想であったがそれを成功させるためには、母親らをして、自身らの教わって来た方法を忘れさせ、その周囲で用いている方法を打破し、又宛らペスタロッチ自身によって教育されて来たが、或はその方法の精神を擱んでいる位に熱心に此の新教育法に没頭させることが必要であった⁽⁸⁾。」その『母親たちのための書』は「子供がついにこの書を投げ棄てて、自然そのものの中において独立的に事物を見るように導くことにあったのである⁽⁹⁾。」

ペスタロッチの理想の女性像は『リーンハルトとゲルトルート』のゲルトルートである。あらゆる不正と邪惡とに対立するところのゲルトルートの偉大な母性である。ゲルトルートの確実性と安定性、思いやりと親切は神の太陽のようである。女性が料理をし、編物をし、普段の家庭生活の中に女性の機能を発揮し、創造力を生み出すことにある。そして自然に人を教育するところに女性の本質がある。ペスタロッチは『リーンハルトとゲルトルート』以後、家庭における母の役割と教育における

女性の重要性とを一生を通して強調し続けた。これはベスタロッツの生い立ちがその背景となっているものと思われる。女性の母としての愛の無限の能力は、その本能的な奉仕と配慮と犠牲とに基づくものであるとする考えは宗教的情操の持ち主である母スザンナ、アンナの敬虔な生活態度、バベリの献身的な犠牲による奉仕、そしてネーフとすばらしい女性たちに囲まれて、女性の力の偉大さを認め、女性の教育の必要性を、大切さを自覚したことによって生れたものである。

ベスタロッツの『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』の扉には「子供の最初の教授は決して頭のことでもなく、また理性のことでもない——それは永劫に感覚のことであり、心情のこと、母のことである⁹⁹。」とある。すなわちベスタロッツは母の持つ感覚的なものをどうしたら道徳的なものとし、個人的なものが一般的なものになるだろうかと常に追究したのである。

両親が子供に教えるということは、人間の生活にとってきわめて重要な、そして意味のあることである。人間が必要とし、知りかつ学ばねばならない事柄は、家庭でそして居間で、自然に学ばれるものである。ところが、最近では家庭でのこのような指導が等閑にされ、子供の教育を学校の教師に任せて、学校教育は退廃していると叫ぶ風潮がある。それは両親が自分たちの責任を回避し転化しているとしか考えられない。教育、今考えなければならないことは学校教育、社会教育以前の家庭教育であると思う。

子どもは生まれたばかりの赤ん坊でさえも自分で生きようとする内からの力を生命をもっている。(ひよこが玉子の殻を内側から必死に打ち破ろうとしているかのよう。)

1985年9月18日と20日にメキシコで起ったマグニチュード7.8と7.3の大地震で死者2,800人不明6,000人と報じられ¹⁰⁰たが、大地震の80時間後メキシコ市総合病院産婦人科病棟の瓦礫の下から次々と新生児が救出されたというニュースは、私たちに生命力の強さを奇跡ではないかと驚きを与えた。

フレーベルは『幼稚園教育学』の中で次のように述べている。「生まれたばかりの子どもは、あたかも親木から落ちてきた種子のなかの熟した核のように、自分自身のうちに生命をもっており、また種子の核と同じように、その生命を、一般的な生命全体との発展的な、だが高まると精神的な関連において、自己活動に内から発展させるものである。だから、活動や行動もまた子どもの目覚めつつある命の最初のあらわれである¹⁰¹。」さらに「自己の内なる意識的生命ならびに自己の周囲の生命を漠然と予感すること、したがって力を訓練し、力を吟味

し、かつ比較すること、自立性を訓練すること、自立性を吟味しかつ比較すること——それが子どもの最初の、最も早期の生命、子どもの最も早期の活動のすべての現象の最も外的な極点であり、最も内的基礎である¹⁰²。」新生児は母親の胸に抱かれ、母親の乳房に吸いつき、母親の鼓動を聞き、母親の顔をまじまじと見つめながら心身ともに健全に育てられなければならない。これが本当の母と子の関係なのである。フレーベルの前述の詩を見る時にこの様子が想像されるのではないだろうか。母は自分の体で作った栄養を自分の体から直接、その子に与える。これこそが神さまから与えられた「莊嚴な仕事¹⁰³」である。ベスタロッツがいう母の教育は「母というものは一番人間を人間らしく作るものである。母の教育を基礎として行くと云うことは家庭教育を重んずると云う思想と相提携して居る訳であります。人間教育と云うものは先ず人間を人間らしく作ると云うことを基礎に置いて、それからその基礎の上で、知恵の為の教育とか職業教育を行って行かなければならぬ。その為には母と云う者は非常に大事な役目を持って居るのであります¹⁰⁴。」

母は子どもの教育の上で大切な役目を担っている。その母の役目は、その教育は今、胎内の教育へと進んでいる。小原はすでにそのことを、『母のための教育』で述べている。

「人間にとって、最初の学校は母の胎内です。最初の教師は母です。しかも生涯最上の教師も母だと思えます。母の乳房から魂が授かると申します。実に母は生の創造者であって、身も魂も母によって成るのです¹⁰⁵。」母たることを、子供を生むことを『重荷』とか、『容色が衰えるとかいわないで、女にのみ与えられる讃美すべき光栄であり、他に譲ることのできない特権であることを自覚し、感謝し喜んで下さい!『母』になることは、それは、ホントに女性の唯一最高の誇りであり、光栄ではありませぬか¹⁰⁶。」

そして小原はベスタロッツを讃えていう。「ああこの母の愛、これがホントに教育の根本力なのです。さまざまな教育の方法も学説も、奥底に、この母心があってこそ生きてくるのです。ベスタロッツにはこの母心があったのです。だから教育の神様といえるのです¹⁰⁷。」

毎日毎日の育児は一見、退屈なものに見えるが、良く幼児を観察し、幼児にに応じての生活をするならば、それは新しい発見の一つ一つとなっていく、母は幼児を通して学ぶことになる。幼児は母親の子どもに対する態度や感情に微妙に反応し、又その子どもの性格を作り上げるのに微妙な影響を及ぼすのである。正しい幼児教育をほどこす良き母親となるためには、まず母親が意識を変えなければならない。自らが幼児との生活の中から「学

ぶという姿勢を持つことである。母親は子どもにとって、一番身近な人であり、信頼のできる人である。そしてまた子どもにとっては自分とは違う一人の人間が自分のそばにいつもいるということを認識する。その母親を通して、他の人を見る目が育っていくのである。現在では、共稼ぎが増し、産後二ヶ月の休暇が終ると働きに出かける母親が多い。ベビーホームに子どもをあずけて働くのであるが、子どもとの触れ合いの一番大切な時に、お金と子どもの一生とどちらが大切なのだろうか。目の前の大金にひかれて働くのはまことに残念なことである。親がいなくても子は育つというが、ある種の欠陥人間ができるのではないだろうか。情緒的に不安定だったり、愛することができなかつたり、思いやりに欠けていたり、何かしらどこかしらに欠陥を持つ人間が育つのではないだろうか。今、子どもたちに、社会全体に欠けているものは、信頼関係ではないだろうか。学校に入学してからはテスト、テストと成績万能主義の中で追いかけられ、これが性格を形成する上でマイナスになっているのではないだろうか。だから、この幼児期に人間にとって一番大切な信頼、人を信じることを正しく心の中に植えつけることが必要である。

ベスタロッチの一生は、どんなにうらぎられても信頼し続け、どんなに欺かれても、それがために失敗続きであったとしても、人を信じ通した生涯であった。

信頼は母と子とのつながりの中から生れる。ベスタロッチは信頼の要である愛、教育における愛の必要性を強調する。その愛の根拠は聖書ヨハネの第一の手紙4章7節から9節の「愛する者たちよ。わたしたちは互いに愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神は知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛は明らかにされたのである。」であり、さらに同章19節から21節「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。」のみ言葉に基づいていることが理解されるのである。

ベスタロッチはどのようにしてその愛を見つけ出すことができたのであろうか。

ベスタロッチは、『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』の第13信において母と子とのつながりの中か

ら愛が生まれ、信頼が生まれ、感謝の気持が生まれることを説いている。「¹³⁻³それ故に、私は自らに問います。如何にして私は人間を愛し、人間を信じ、人間に感謝し、人間に従順であるようになったか——如何にして、人間愛、人間感謝、人間信頼などが、本質的にその上に基く感情と、人間の従順を形成する技能とは、私の自然性に入って来たのか——そうして、私は、それが、主として幼き子供と母親の間に存する関係にはじまるということを見出すのです。

¹³⁻⁴母は、次のように、せねばならず、それより他はできないし、またその全く感覚的な本能の力からそうせざるを得ないのです——子供を養い、育み、安全にし、喜ばせる。彼女はそうします。子供の要求を満足させ、彼に不愉快なものは遠ざけ彼の出来ないことは助けます——子供は世話され喜ばされ、愛の芽は彼の中に開発されます¹³。』

母の教育は愛の教育であること、それは神と人とのイエス・キリストとのつながりにおいてその人間性を愛によって回復されることを教えるものである。

2. 宗教教育

①ベスタロッチの信仰

ベスタロッチは自分の信仰について『隠者の夕暮』(1780)で明らかにしているが、小原はベスタロッチの信仰について次のように述べている。「信仰の内容は、ベスタロッチにありてはいうまでもなく、親子関係である。神は人間の親であり、人間は神の子供である。この親子関係を彼は到る処に高調して居られるが、『隠者の夕暮』一卷に最も多く現われる言葉の一つであろう。この親子関係が人間一切の活動の基礎である¹⁴。』

ベスタロッチの理想の人格はあらゆる不正や邪惡に対向するゲルトルート¹⁴その人の中にある偉大な母性にあったが、ベスタロッチは一子ヤーコブ(1770-1801)の誕生を契機に父親となったことによって父の心が自覚され、父と子、さらに神と自分といった宗教的境地へとその思いは深まっていったのである。

それではしばらく『隠者の夕暮』の中からベスタロッチのその境地を伺ってみたいと思う。この『隠者の夕暮』にはベスタロッチが追究した父心が描かれている。そこには神への信頼がある。

「人間は心の静けさがなければならぬ。

如何にして彼はその少年時代において此の静けさに向って教育せられるか。子心と愛と従順と感謝とによる。老年においてはすべての父たる神に対する子心による。

人類の至上親たる神に対する信仰は生活の静けさの唯一なる支柱である。

神の信仰の純なる教育は父の信仰であり、無邪気であり、子心である父なる。神を認むことは人類の最初の本質的な関係の認識である。それからすべての遠き関係の聖き福が湧き出る。

宗教——すべての主たり父たる神を認めること。

神の信仰、神の親心に対する人類の信頼する子心。
神の信仰、世界の一般的聖福に対する人類の関係における人類の情調。

神の畏敬、神に対する子供の信仰、子供の従順は、育成せられたる世間的知恵の結果ではなくして、真の人間らしき純なる世間的知恵の根本であり発端であり基礎である。」

1780年ノイホーフ (Neuhof) の農場と学校の経営が失敗に終って、ペスタロッツは著作に励むことになったが、1787年の『リーンハルトとゲルトルート』第4巻をもって著作の第1期を終り、その後10年間著作活動を休んで働いた。その間に彼がベルリンの友人ニコロヴィウス (Nicolovius) に宛た手紙がある。それは自分の苦悩の一端を吐露したもののようであるが、それが原因となって「ペスタロッツはクリスチャンではなかった」との証拠の手紙とされているものである。しかし、一方ではニコロヴィウスに対して、世評に対して、ペスタロッツが自分の信仰を弁明しているようにも受けとられたものである。

「リヒテルワイル (Richterswyl) にて。

1793年10月1日

友よ！私は生の混濁中にもまれて世の最も賢い善良な人々がその生存の清浄を生活の第一の目的とする時に得る神のような純な力の泉を余り飲んでいない。悲しいことに、私の仕事は自我と愛と卑しい欲望のために汚れている。

成程、私は青年時代から常にあらゆる善に熱心であり熱望していた、私が進んで行かねばならぬ所には世界の泥沼があって、そこには全く別な法律があるのに私は知らなかった。又準備もしなかった。そして成年期の危険な時に際して私の力以上の重荷を負わせられ、落ちつけずに、私自身との調和の圏に投げ出された。そこで私

は本世紀の死の道を迎って、宗教に導く感情と宗教から引きもどす判断との中間にさまよい、私の心の宗教的熱心を冷やかにしてしまった。がそれかと云うて宗教に反対するでもなかった。

短い教育の夢につづいて迷いに迷って心の平和をすっかり破って、心の中の力を奪いとられてしまった。この事の管理に私は誤りをしていたために、長い間誤謬、いな半ば真理の奴隷となった。そしてその誤りで偶像を作り、この偶像崇拝の結果として悲しくも私が今まで持っていた信仰の感情の僅かばかりをすべてなくしてしまった。

私が懷疑を以て真理と目するが故にはなく、私の生涯の諸々の印象の総和が私の魂からあらゆる祝福と共に信仰を逐い払ってしまったから私は懷疑するのである。

このように運命によって追窮されて、私はキリスト教にあるものは霊の肉に対する勝利についての最も純潔高尚な教訓だけであることを知った。即ちこれは我々の性質をその真の高尚さに向上させる唯一の可能な方法なのである。

これは私がキリスト教の真髓としているものであるが、私は又多くの人々が生れながらの性質として真のキリスト教信者となることの出来ないことをも考える。

私はキリスト教は地の塩であると信ずる。

私は真理の探究をするのに自分の研究をこれらの法則、これらの権利に限ってしまうのはその見地の偏狭なることをよく自覚してはいるが、私にとっては自分の声は来るべき神たるもののために道を備えよと野に叫んでいる声のように思われる。まことに、時としては私は自分が何をしているのか、或いは何処に向っているのかを殆んど知らないことがあるが、でも私は何を自分がするのかを言わずには居られないのに気がつく。そして私をめぐる致命的な圏のために、逃れる術もなく、この上もなく苦しむことはあっても、私の言う所はすべてこれ少くとも真面目である。そして私は自分の人格の完成にも及びもつかず、又何時の日にか人性が向上するであろうと私は信じている境地のことは何も知らずに止む。が、我が友よ。キリスト教の弱点については今はこれだけにしてやめよう。…」

このように信仰に対しての悩みの中にあったペスタロ

ッチも『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』(1801)では、

「¹⁸⁻¹——神を敬うことの本质は、私が人類の発展に関して一般的に真理であると考えた根本原理となる関係に於てあるでしょうか。

ここでも私は、私の課題の解釈を私自身の中に求め、自問致します。如何にして神の概念は私の中に芽生えるか、私が唯一の神を信じ、私自身を神の腕にゆだねるということ。また私が神を愛し神を信頼し、神に感謝し、神に従う時、私が幸福に感ずるということは如何にして生ずるのか。

¹⁸⁻²このことは直ぐに分るのです。愛、信頼、感謝、などの感情、従順の能力は、私がそれを神に向ける前に、私の中に発展していたに違いないのです。私が神を愛し、神に信頼し、神に感謝し、神に従順であるように高められる前に、私は人間を愛し、人間を信頼し、人間に感謝し、人間に従順でなければならない。

『そは、彼の見る兄弟を愛せざる者、いかでか、彼の見ざる天の父を愛するを欲せんや²⁴』²⁵」

ペスタロッチは目の前にいる人間を信じないでどうして神を信じることができるだろうかと私たちに問うているのである。父心としての神を理解するために私は仲介者としてのイエス・キリスト、十字架で死に復活したイエス・キリストがいなければ、キリスト教の信仰は成り立たないと思う。もう少しペスタロッチの信仰を確認したいと思う。

1808年の演説の原稿には次のようなものがある。「一週間のうちで、イエス・キリストが苦しみ、そして死んだ此の日ほど大切な日はない。我々は昨日は冬の休息のことを語った。私は皆に、土地をよく準備せねば種子は芽を出すことが出来ないのをわからせようとした。土地の準備が悪かったら、冬の雪も太陽の仕事を手助けすることが出来ないで、冬の休息であっても種子は亡んでしまう。

それと同じように、人の生涯の種子が立派な収穫をもって来そうでなければ、平和な死や幸福な犠牲になることは望まれない。人間は一日の仕事を了えない中は、横になって眠ることは出来ない。

このことがほんとうだとわかったら、キリストの犠牲と死とは彼の地上に於ける仕事の完成であることがわかる。彼の最後の言葉は、『今は終わった』というのである。彼はその仕事が完全に終わったので平和に死んだ。彼の仕事が未だ終わっていなかったら、彼は死ななかつたであろう。

彼はその天に在します父と人類とのために生きることによって、謂わば彼の休息を勝ち得たのである。

我々は常に自分に向って問わねばならぬ—私は自分の改善につくしたか。自分の行為はいくらか聖くなったか、と。—自分の仕事を完全に了えた人のみが、静かに死に面することが出来る。

我々は何一つ仕上げない。どちらを向いても我々は無力だ。我々の行為は破れかぶれ、切れぎれである。が我々は完全を求めて努力するうちに、初めて休息を見出すのである。神を愛し、父母を愛し、且お互をもっと愛すようにつとめよ²⁶。』ペスタロッチはこのような考えを朝夕の礼拝の時、あるいは散歩をしながら話した。

さらに1810年のクリスマス講演では、「——この聖なる喜びの時は聖なる贖罪の時であった。この時地上は天国のような聖い地上となり、滅ぶべき人間の住居は、不滅の生命の香に漂った。死と悲しみは地上から消え失せたかと思われた。

おい、イエス・キリストよ、いま精霊となりて我々が前に現われ給わむことを！あゝ、キリスト者には、幼な子キリストのなかの目に見えざる神の愛が、その姿も形も彼らに似て、しかも彼らを喜ばし、彼らに贈物を与えんがため、天国から降り来る神のみどり児として現われ給う、あゝ、我々がキリスト者の子の如くあらむことを！

イエスは此時以後我々のぎせいとなり給いし、主の司祭となり給うたのである²⁷。』

ここではイエス・キリストが私たちのために生まれ、私たちのために十字架で死なれたことを考えなければならないとしている。私たちはイエス・キリストによって神の許しが与えられ、聖化され又イエス・キリストによって互いに愛することを学び、永遠に神と結ばれ、共に生きることができることを喜びとし感謝しなければならないとしているのである。そして私たちはこの喜びと感謝を他の人々に分ち与えなければならないのである。

ペスタロッチはその行動、全生涯、熱心さと普遍的な慈善でもって、自らがキリスト者であることを立証している。先のニコロヴィウスへの弁明は誰しもがその生涯において度々繰り返すところの信仰への挫折の時ではなかったのではないだろうか。

1818年1月12日の演説には、贖罪のことが書かれている。

「キリストは邪まなる人々、悪事をなす人々は愛しなかつたと、誰人にも言わすこと勿れ！彼は彼らを神の愛を以て愛し、彼らのために死んだ。彼が悔い改めを叫んだのは正しい人ではなく、罪人たちに向ってであつ

た。彼は初め罪人の信者でないことを見たが、彼自身の信仰によって之を信者とした。彼はその謙遜でないのを見出したが、彼白らの謙遜によって之を謙遜ならしめた⁸⁹。」

ペスタロッチは1815年に妻アンナが亡くなった時、アンナの亡骸を前にして次のように言っている。『『このような悩みの時にあって我々に苦しみに加え、望みを起させる力を与えたものは何であったか』と言って、近くのバイブルを取り上げ、更に叫んだ。『これこそはあなたが、我々二人の勇氣と力と平和とを引き出した源である！』⁹⁰』さらにペスタロッチ自身が亡くなる時、私は間もなく真理の書物を読もうとしている。私は永久の平和に行こうとしているのだ⁹¹。』と叫んで、聖書の信仰に立ち返りキリスト教徒として亡くなったのである。

(2) 宗教教育

愛の教育のところで述べたようにペスタロッチの宗教教育はイコール愛の教育なのであるが、それは母の教育であり幼児教育なのである。母性愛は人間の感情の中で最も純粋なものであり、人間的なものである。そしてそれは神の愛によって生まれるのである。

ここでは愛の教育の原動力である、宗教教育を取り上げてみたい。

ペスタロッチがロンドンのグリーブス⁹² (Greaves, J. P. 1777—1842) に宛てた『幼児教育の書簡』はペスタロッチがイギリスの母親のために書いた幼児教授法なのであるが、その中にはペスタロッチの宗教教育がとても明解に書かれている。

「第5信 (1818年10月24日)」

神は、私たちの本性に備わる全能力をあなたの子どもに与えられました。しかし、重大な問題がまだ解決されていません。子どもの心と頭と両手がどのように使用されたらよいのでしょうか。それらが誰のために捧げられたらよいのでしょうか。このような、解答いかにあなたのいと子の以後の人生における幸不幸にかかわる問題が、まだ解決されていないのです。

神は、精神的本性をあなたの子どもに与えられました。神が、かれの中に良心の声を吹きこまれたのです。さらに、神はそれ以上のことをなされました——神の声に耳を傾ける能力を、かれに与えられたのです。独りで天に向けられる日を、かれに与えられたのです——目を天に向けるだけで子どもの運命がかならず開けることを、あなたに悟らせられているのです。——

ご存知の通り、かつて神はヤコブの12人の子どもの一人に天界を開かれ、かれに高い碧空に達する梯子を示されたと伝えられています。そうです、その梯子はア

ダムの子孫全員のために下ろされているのです。それは、あなたの子どものために差し出されているのです。

——

登るのに必要な諸力のいずれもが、すでにかれに与えられています。しかし、それらの諸力を引き出す際に助力を与えることは、あなたの職分です。天に通じる梯子を、いつもあなたの目の前に置かせて下さい。希望と愛の天使たちの昇降があなたに見える、信仰という梯子を⁹³。子どもたちには生まれる時に神から十分な能力が与えられている。母はそれを感謝をもって受けとめ、その能力を十分に発揮できるよう助力する役割を担っているのである。

「第7信 (1818年11月8日)」

——幼児には次のような基本的特徴がある。

神の導きによって仲間の中で目立つ存在にさせられるだけでなく、信仰の光の中を歩め、『すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える⁹⁴』愛——『いつまでも絶えることがない⁹⁵』愛で心を満たせというかれの創造者の至上命令に従わせられる基本的特徴である。

私は、この基本的特徴を、人間生命の最初の段階において発現されるものまでを含めて、愛と信仰の素質と呼びました。

——

親切によって、それ以外の手段による以上の成果があげられるということは、あえていいますが、子どもの中に親切な呼びかけに対する応答のようなものがあるということに違いありません。親切が、かれの本性に最も適したものであるに違いありません。親切が、かれの心の中に共感を呼び起こすのに違いありません。親切な呼びかけに対する応答のようなものは、何に由来するのでしょうか。私は、躊躇せずに、善なるものすべての贈与者に由来する、と主張します。この贈与者の良心の声と、『さまざまな時にさまざまな仕方』で人類に話しかけられるかれの尽きることのない慈悲とは、実際、いずれも人間の愛と信仰という素質に向けられているのです⁹⁶。この与えられた愛と信仰は母親が胎内に自分の子どもがいると感じとった時から、呼びかけが始まる、対話が始まるのである。神からの呼びかけが私たちの心の耳を傾けないと聞きとることができないように、胎児との対話は喜びと感謝の気持がないと感じとることもできず、対話が成立しなくなるのではないだろうか。これはポール・トゥルニエ (Paul Tournier 1898～) の『なまえといのち⁹⁷』の中で実証されている。

「無言症や心因性の自閉症、小児の精神分裂病などの治療の時に、そのような病気の子どもにくりかえし母親

の声のテープを聞かせます。このテープは、一定の波長領域の音を電子的に濾過して除いてあります。このねらいは、子宮の中で聞いた母の声とほぼ同じものを、子どもに聞かせようというのです。

次に、消去した部分を、次第にもどしていきます。そして最後には、子どもは生後聞いているのとまったく同じ母の声を聞くことになります。このテクニックによって得た結果は、おどろくべきものでした。それまで、まったく意志の伝達のできなかった子どもが、無言症から脱したのです。生まれる前に聞いたのと同じように母の声を聞かせることによって、医師は、その子の、意志を伝達しようという欲求をひき出すことに、成功したのです⁹。妊娠中の母親はいつも安らかな、幸せな心の状態を維持することが大切である。胎児との交信の中から母親自身の自覚と責任、子どもへの愛が育まれていくのである。胎児に言葉が理解できるのではなく、母親の声と心臓の鼓動、呼吸のリズムを無意識のままに心にきこみこまれているのである。

ペスタロッチからグリープスへの第33信（1819年5月1日）

「母性愛は、教育における第一の原動力です。しかし、母性愛は、人間感情中で最も純粋であるにしても、人間的なものです。しかも、救済手段が人間のではなく神の力の中にあるのです。

母親に対する幼児の愛と信頼は、母性愛より純粋な感情——人間の胸に宿りうる至純至高の感情——もはや一人だけに限定されていない愛と信仰の感情——もはや不純な中身と混り合うことなく他のあらゆる感情以上に高められ、謙譲を説いて人間を向上させる感情——人間の創造者イエスに対する愛と信仰の感情の、前兆に他ならないのです¹⁰。母親に対する愛と信頼は、母親が子どもを愛し、慈しみ、徹底的な自己犠牲のうちに育まれるものであると思うが、その母親の愛の背後には創造者の大いなる愛が存在していることを忘れてはならない。この創造者の愛を知ることなしに、母親は子どもへ底知れぬ愛を注ぐことはできないのではないだろうか。

「第34信（1819年5月12日）

キリスト教の啓示では、信仰という方針が『望んでいる事柄の確信とまだ見ていない事実の確認¹¹』として、保持されて来ました。しかしその方針は、愛という積極的な方針と緊密に結びつけられていました。

キリスト教の真理の受容に最適の精神状態を最もよく表現している聖書の章句の中でも、とくに適切な説明

は、『だれでも幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこにはいることは決してできない¹²』とする救世主キリストの言葉だと、私はつねに考えています。

——
——
幼児の精神に備わる感情、すなわち信仰と愛との前兆は、誰よりもキリスト教徒の母親にとって最も大切なものです。母親としての情愛を示す方法は唯一つ——わが子への神の贈物を保護すること、贈与者に感謝しかれからの贈物の増大を期待すること、わが子の萌芽の開花に全力を注ぐこと、本分に関して寛大で意志堅固で辛抱強いこと、情愛の動機を自分の心の中に求めて天恵を仰ぐこと、これだけだということをキリスト教徒の母親に確信させて下さい。

この確信に基づいて、わが子を信仰に、信仰から愛に、愛から幸福に導ける母親は幸せなのです。さらに、純粋かつ謙虚な信仰心によって、自分の幼児期の夢を大事にしてくれた人の思い出を——いかなる教訓よりも力強く、自分の胸の中の母性愛の声と同じぐらい大声で、『思い出せ——まねよ——屈せずまねし通せ』と要求する模範を、本分遂行の過程で思い出せる母親は、非常に幸せなのです¹³。

私はペスタロッチがグリープスに宛てた手紙を長々と引用してきたが、それは、この手紙の中にペスタロッチの教育の心髄、愛の教育＝母親の教育＝宗教教育が如実に描き出されていると思ったからである。この手紙はペスタロッチの154以上の論文の総括でもあるかのようになり、ペスタロッチの教育理念というものが、もっとも子どもに身近な母親の教育を通して、私たちに切切と訴えるのである。

母と子の愛と信頼関係も、子どもが一人立ちをするためには母親への全き依存からぬけ出さなければならない。その独立を得るということは母親が絶対的他者ではなく、さらに大いなる他者の存在を教えるもの、それこそが、母親の役目であると思うのである。母親は母も子もその大いなる他者に受容されていること身をもって子に伝えなければならないのである。

おわりに

今、キリスト教主義の学校（大学）では建学の精神の再確認（見直し）がしきりに行われている。どの学校も「キリスト教に基づく愛と自由の精神」を教育理念として掲げているようであるが、その実「建学の精神、そんなものはないでしょう。」あるいは「建学の精神？それは

創設者ですよ。」というような声が聞かれているような現状でまったく嘆かわしいことだと思う。

教育はキリスト教に基づく基づかないにかかわらず、誰にでも通じる誠意と愛と信頼がなければならない。成長期にある子どもたちを預かりながら、自分の出世や自分の研究に没頭して、教育は二の次という教師はいないだろうか。教育は日進月歩、子どもたちの体質が変わっていくのと同時に、その子どもたちに対応するための教育方法も変えていかなければならない。しかし、教育の根本理念というものは不動のものであると考える。

私はこれまで『小原國芳からペスタロッツヘ』と題して二人の共通点である“Learning by doing”を追究してきた。二人のそれぞれの人となりを見、二人の夢を考え、そして二人をそれぞれ支えた妻たちアンナと信のことを思い、愛の教育＝母の教育＝宗教教育であるというところまで辿ってきた。

小原もペスタロッツも「いったい小原は、ペスタロッツは本当にクリスチャンなのか」と一度ならず二度、三度と疑問視され続けてきたが、これまで見てきたところでは、二人を支えているものは、二人の教育の土台となっているものはキリストの教えであることが理解された。

二人は「人間とは何か」「まことの人間になるためにはどうしたらよいのか」を生涯の課題としていた。「人間」とは、スイスの精神医学者であるポウル・トウルニエは次のようにいっている。「聖パウロは万物を神から出て、神の中に在るとし、神を宇宙の創造神、万物の根拠「すべてのすべて」(God is all in all) としています。神の創造性が世界を存在させ神が潜在的な可能性(本質)を現実化して万物を創り、万物を常に維持するために力を与えついに終末において、万物は神の永遠の生命に参与させられ、すべての創造が完成される。そして、その初穂が人間であるとされている。人間は神の創造の業の極みとして、『神の像』を与えられています。⁴²⁾

神の似像として創られた私たち人間は、たえず、神の、神からの呼びかけ(Callings)に答えるよう努力しなければならぬ。もしキリスト者でないならば、その人はその人の良心にいつも問いかけ、問い正していかなければならないと思う。

ペスタロッツは1809年元旦の講演で、「愛に基礎づけられ、愛に出発せる人間の精神と技術の陶冶なくしては、彼は高い意味における人間となることはできない。⁴³⁾」といている。愛がこれほどまでに教育に欠くことのできないものであるとされているのに、現代の教育には愛が欠乏している。信頼が欠乏してしまっているように思われる。

最近マスコミを賑わしている『いじめ』の問題はその顕著なものではないだろうか。愛されたことがない子どもたちは、その愛を求めて、他者とのつながりを求めるが、そのつながり、交信の仕方を身につけていないためにそれが逆の形で現われてしまっているのではないだろうか。「いじめ」をする子は、その友だちが一人の自分と同じ人間であること、愛すべき人間であることを理解せず、物として、ただいじめる対称物としか考えられないのではないだろうか。

両親は学校教育の荒廃を訴える前に自分たちの家庭に對話がなされているか子どもたちを充分に受容してあげているかを反省すべきであると考え。

家庭教育、現在は核家族がふえ、大人になりきれていない両親たちの子ども、子どもの子どもがふえてきている。さらに家事の合理化によって母親たちは時間を持て余すことになり、パートや外出(スポーツやカルチャーセンターへ)が多くなってきている。

家庭の中の仕事は多様である。母親が家庭教育の重要性を自覚するならば、職業婦人以上の能力を必要とするものである。

育児一つをとってみてもそれはむなしい仕事ではなく生きがいのある仕事である。育児は毎日同じことの繰り返し返しかもしれないが、それを忍耐をもってできるのは母親なのである。その忍耐をもってというよりも暖かな愛をもって幼児と接するならば、幼児もまたその愛に答えてくれるのである。

家庭教育の一端を担う男性は、今、会社人間になってしまって、父親としての責任を放棄し、父親としての自信喪失が子どもの人格形成に支障をきたしてきているという。核家族になってしまってと嘆いていたが、最近では、父親不在、母親不在となってしまうと育児も0歳教育、学童保育といったように家庭外の施設で行われるようになってきている。家庭は、家庭での教育はどうしてしまったのであろうか。

母と子との對話は子どもが成長していくために必要欠くべからざるものであるはずなのに、父親不在、さらには母親不在となってしまうと、子どもたちはその内からこみあげる問いを、自分の存在を誰に訴えたらよいのだろうか。ここに問題がある、その欲求不満が屈折し、異常な形をとっていくのである。家庭内暴力、校内暴力、そして「いじめ」である。現在教育に必要なのは母親の再教育である。

子どもをかけがいのない存在として受けとめ、正しく関与していく姿勢を学ばなければならないのである。最近では放置されている子どもが多くなっている一方で、過保護、甘やかし、溺愛など誤った関与をしているために

子どもが非行に走っていく問題も多くなってきている。

ペスタロッチやフレーベルの時代の教育に帰れとはいわないが、教育の方向を早急に変えることが必至である。

最後にもう一度ペスタロッチとフレーベルの教育に関する考えを引用して終りとしていたい。

ペスタロッチ「彼の教育の第一時限は彼の誕生の時であること。彼の感覚が自然の印象を感受し得るものとなる瞬間、実にその瞬間から、自然は彼を教育するのである。新しい生、そのものこそ、これらの印象を感ずるために目覚める能力そのものなのです。その全力と全衝動とを以て、その自己形成の発展を求めている完全な生理的芽生えの目覚め、また、人間たれんと欲し、人間たれべく定められた当に完成した動物の目覚めに外ならないのです。」（『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』1—33, 37頁。）

フレーベルは、「女性全体を、彼らが自己の使命と品位とを認識し認するまで高めようとする努力であり、またこの使命と品位との要求に応じて生活できるように高める努力」（『幼稚園教育学』497頁）が真の教育的な時代として必要になってくるといっている。

教育まさに Learning by doing 子どもはその母親の胎内にいる時よりその生きる力を充分に与えられ、学びとる姿勢がつくられているのである。そしてたえず母親を中心として物を見る日が育てられるのである。今、母親はそのことを自覚し、責任をもって育児をしてほしいと願うものである。

私は小原、ペスタロッチそしてフレーベルを通して今日の教育のあり方について考えさせられた。今後の問題、課題として、たえずペスタロッチ、フレーベル、小原へと遡りながら女性のあり方について研究を続けてゆきたいと思う。

引用文献・参考文献

- ペスタロッチ著 福島正雄訳『隠者の夕暮、略伝、言行片々、希望、新婚生活日記、育児日記』
玉川大学出版部 昭和44年版
ペスタロッチ著 鯉坂二夫、四本忠俊訳『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか、学園講演集』
玉川大学出版部 昭和44年版
ペスタロッチ著 田尾一訳『リーンハルトとゲルトルート（酔人の妻）』玉川大学出版部 昭和44年版
ペスタロッチ著 田口仁久訳『幼児教育の書簡』
玉川大学出版部 1983年版
フレーベル著 荘司雅子訳 全集4『幼稚園教育学』
玉川大学出版部 昭和56年版
フレーベル著 ヨハネス・ブリュッファ編 荘司雅

子訳 全集5『母の歌と愛撫の歌』

- 玉川大学出版部 昭和56年版
ド・ガン原著 大日本学術教会訳修『ペスタロッチの生涯と其の事業』 日本書院 昭和5年版
小原國芳著『ペスタロッチを慕いて』
玉川大学出版部 昭和54年版
小原國芳著『母のための教育学』
玉川大学出版部 昭和55年版
福島政雄著『ペスタロッチ 隠者の夕暮』
福村出版株式会社 1978年版
福島政雄著『ペスタロッチ』
福村出版株式会社 1982年版
稲富栄次郎著『ペスタロッチの生涯と思想』
福村出版株式会社 1982年版
伊藤忠芳著『ペスタロッチの教育思想』
福村出版株式会社 1982年版
玖村敏雄著『ペスタロッチの生涯』
玉川大学出版部 昭和58年版
O.F.ボルノウ著 森昭、岡田渥美訳
『教育を支えるもの』黎明書房 昭和51年版
ポール・トゥルニエ著 小西真人、今枝美奈子訳
『なまえといのち』人格の誕生
日本YMCA同盟出版部 1978年版
赤星進、山口實他著『トゥルニエとの出会い』—神学と精神医学の間—第3集 聖文舎 1985年版
松本 昭著『愛による愛への教育』聖燈社 1982年版
井深 大著『0歳からの母親作戦』
ごま書房 昭和59年版
井深 大著『幼稚園では遅すぎる』
ごま書房 昭和59年版

注

- (1) 小原國芳著『ペスタロッチを慕いて』玉川大学出版部 昭和55年版 26頁。
- (2) (1)と同じ 110頁。
- (3) フレーベル著 ヨハネス・ブリュッファ編。荘司雅子訳『母の歌と愛撫の歌』フレーベル全集5 玉川大学出版部 昭和56年版。
- (4) (3)と同じ 15頁。
- (5) (3)と同じ 271頁。
(ヨハネス・ブリュッファの「あとがき」より)
- (6) (3)と同じ 279頁。
- (7) Roger de Guimps
“Histoire de Pestalozzi de sa pensée et de son œuvre 1874”の著者、6才〜15才までイヴェルドンのペスタロッチの新学校で直接ペスタロッチの教育を受けた。（同書監修者小西重直の序より）
- (8) ド・ガン原著 大日本学術教会訳修『ペスタロッチの生涯と其の事業』日東書院 昭和5年版 296頁。
- (9) 福島政雄著『ペスタロッチ』福村出版株式会社 1982年版 172頁。
- (10) ペスタロッチ著 鯉坂二夫訳 全集3『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』玉川大学出版部 昭和44年版の扉。
- (11) 1985年9月25日付 朝日新聞。

- (12) フレーベル著 荘司雅子訳 全集4『幼稚園教育学』玉川大学出版部 昭和56年版 46頁。
- (13) (12)と同じ 55頁。
- (14) 井深 大著『0歳からの母親作戦』ごま書房 昭和59年版 37頁。
- (15) 福島政雄著『ベスタロッツ 隠者の夕暮』福村出版株式会社 1978年版 69頁。
- (16) 小原國芳著選集5『母のための教育学』玉川大学出版部 昭和55年版 32頁。
- (17) (16)と同じ 32頁。
- (18) (16)と同じ 39頁。
- (19) (16)と同じ 277頁。
- (20) (1)と同じ 90頁。
- (21) ベスタロッツ著『リーンハルトとゲルトルート』（1781）、『ゲルトルートはいかにその子等を教うるか』（1801）の女主人公。
- (22) ベスタロッツ著 福島政雄訳『隠者の夕暮』（稿本）』玉川大学出版部 昭和44年版 169～188頁抜粋。
- (23) (8)と同じ 124～125頁。
- (24) ヨハネ第一の手紙4章19～21節。
- (25) (10)と同じ 276頁。
- (26) (10)と同じ 322～323頁。
- (27) (10)と同じ 372頁。
- (28) (10)と同じ 478頁。
- (29) (10)と同じ 376頁。
- (30) (10)と同じ 478頁。
- (31) 1827年当時ロンドン幼児学校協会（London Infant School Society）の事務を取り仕切っていた。彼はベスタロッツからの手紙を自費出版したのである。グリープスは1818年スイスにわたり、ベスタロッツが校長を勤めるクリニディの貧民学校とイヴェルドンの学校とに約4年間滞在して英語の指導をした。（ベスタロッツ著 田口仁久訳『幼児教育の書簡』解説による）
- (32) ベスタロッツ著 田口仁久訳『幼児教育の書簡』玉川大学出版部 1983年版 43～44頁。
- (33) コリント人への第一の手紙13章7節。
- (34) コリント人への第一の手紙13章28節。
- (35) (32)と同じ 49～51頁。
- (36) ポール・トウルニェ著 小西真人、今枝美奈子訳『なまえといのち一人格の誕生一』日本YMCA同盟出版部 1978年版。（ポール・トウルニェはスイスの精神医学者である。）
- (37) (36)の103頁。
- (38) (32)と同じ 179頁。
- (39) ヘブル人への手紙11章1節。
- (40) マタイによる福音書18章5節。
- (41) (32)と同じ 183,186,187頁。
- (42) 赤星進他著『トウルニェとの出会い』聖文舎 1985年 96頁。
- (43) ベスタロッツ著 四本忠俊訳『学園講演集』玉川大学出版部 昭和44年版 336頁。